

クロメの増殖について

竹内四郎

クロメはサザエ、アワビ類、ウニ類の餌料源としてあげられ、多用されている。このため本種の増殖を目的として採苗から培養まで行なった。

方 法

クロメの採苗は昭和58年10月28日に当場でワカメの採苗技術に準じて行なった。

採苗はクロメ母藻(2.0kg)を3時間陰干した後、採苗槽(3.1×0.9×0.7m)に2時間30分収容した。そして、採苗枠(80×55cm)50個(種糸はクレモナ36本撚り)を投入し約1時間浸せきした。その後、採苗枠を培養槽(3.1×0.9×0.7m)に移し、枠間隔を約6cmとした。

換水はクロメの幼体が目視出来るまでを2-3ℓ/分それ以降20-30ℓ/分とし、採苗後に7日間、施肥後に3日間を止水とした。

施肥は硝酸カリ100g/トン、第二磷酸ソーダ20g/トンを散布し、照度の調整は行なわなかった。

採苗後は培養槽で214日間の生育状況を観察した。

結 果 と 考 察

図1に試験期間中の水温変化とクロメの全長組成を示す。これをみると水温は採苗時(10月28日)が約20°C、それ以降徐々に降温し2-3月に最も低い9°C台になった。その後水温は漸次上昇し6月上旬に18°C台となった。

クロメ幼体の出現は採苗間もなく種糸に雑藻が多く着生したが、74日後の翌年1月上旬に全長1mm前後の個体が部分的に観察され、214日後の6月上旬には120-250mmに成長した。

クロメは水温の上昇期に併わせて成長がみ

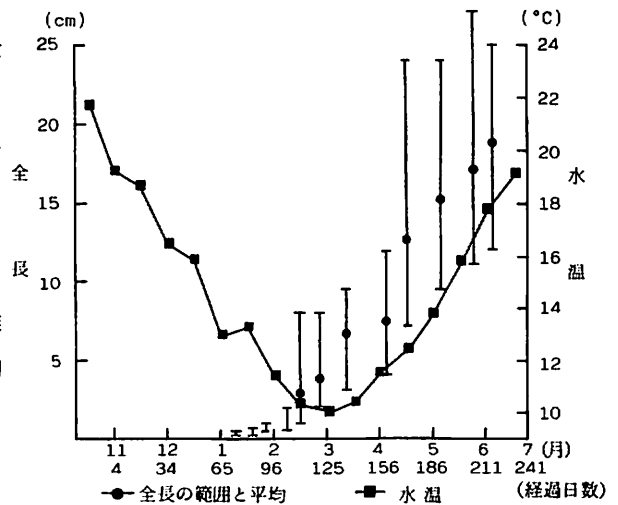


図1 クロメの成長と水温

られたが、採苗枠に種糸を巻いた状態で長期間室内培養したので生育が著るしく損なわれていると思われる。

クロメ幼体の付着状況は採苗枠の上下変更の回数が少なかったための照度不足と密植により水槽下層の生育環境が悪化し、採苗枠の表層に近い部分で多くみられた。

今回はクロメを培養槽で長期にわたり生育させたので成長するにしたい種糸部の幼体が脱落し最終的に採苗枠の枠部分にのみ生残した。

このことはクロメの糸状根が成長にしたい発達し、固着する相当な付着基質が必要なため枠部に多くが繁茂したものと考えられる。すなわち、クロメはワカメ養殖同様、種糸をロープに巻き付けるか、または他の付着基質に接着すれば増殖は可能であろうと推察される。